

宮城県遠田郡涌谷町小里

長根窯跡

昭和46年2月

涌谷町教育委員会

序

わが町 涌谷は、古代の遺跡が特に多く、われわれの祖先の生活文化を如実に物語っています。

昭和45年12月16日、国指定史跡長根貝塚より東へ約1kmの地点において、町道小里長根線道路新設工事作業中に現場より8世紀はじめのものと推定される須恵器の窯跡を発見いたしました。全国遺跡台帳にも登載されていないものであり、早速、宮城県古川高等学校教諭佐々木茂楨氏に依頼し調査をおこないましたところ、貴重な遺物が数多く発見される極めて重要な窯跡であることが判明いたしました。

ここに調査の結果がまとまりましたので、調査報告書を発行することにいたしました。学術資料としてご活用いただければ幸いと存じます。

本調査に際してご多忙の中、ご援助をいただきました宮城県教育庁社会教育課技術主査志間泰治氏、宮城県多賀城跡調査研究所長岡田茂弘氏をはじめ関係者の各位に厚く御礼を申し上げる次第でございます。

昭和46年2月

涌谷町教育委員会
教育長 百々六郎

目 次

序	涌谷町教育委員会教育長 百々六郎
1. 遺跡の位置	1
2. 発見の経過	3
3. 遺構の現状	3
4. 出土遺物	3
5. 遺物の考察	7
6. むすび	8

図 版 目 次

図版 1 長根窯跡付近航空写真

図版 2 a 窯跡遠景

b 窯底残存部

図版 3 須恵器杯 I

図版 4 須恵器蓋・杯 II

図版 5 須恵器長頸瓶

図版 6 須恵器甕

挿 図 目 次

第1図 宮城県北部の古代遺跡分布図

第2図 長根窯跡付近地形図

第3図 須恵器実測図

第4図 須恵器甕拓本

第5図 須恵器蓋・杯比較図

~~~~~  
本稿の執筆、編集には、宮城県古川高等学校教諭佐々木茂樹と宮城県多賀城跡調査研究  
所技師桑原治郎があたった。

## 1. 遺跡の位置

長根窯跡は、宮城県遠田郡涌谷町小里字長根南79の2番地の大川直行氏所有地内に存在する。この地は、国鉄石巻線涌谷駅の北方約7kmの地にあたり、涌谷町の中心から県道仙台一気仙沼線によって篠島丘陵北麓の小里部落付近に達すると、水田地帯をへだてて約1.2km北方に長根窯跡が存在する長根丘陵をのぞむことができる。長根丘陵は、遠田郡田尻町の大貫丘陵から東へのびた幅約400m、延長約5kmほどの細長い丘陵で、砂礫ないし粘土を主体とした新第三紀鮮新世の地層で構成されており、丘陵上の標高は20m前後である。この丘陵の北側には追川が流れしており、丘陵の周囲は追川が形成した海拔4m前後の沖積低地であり、現在では治水工事の完成によって広大な水田地帯と化しているが、かつては追川の大遊水地帯であった。

長根窯跡は、この長根丘陵の南斜面にあり、丘陵東端より約1km西の地点に位置する。窯跡の付近は、畑地あるいは雑木林となっている緩傾斜地であり、窯は丘陵斜面の頂部近くに存在する（図版1・2a）。

長根窯跡の周辺には、数多くの遺跡の存在が知られている。国指定史跡である長根貝塚は追川沿岸に数多い縄文時代遺跡を代表するものであるが、その位置は今回発見された長根窯跡の西方約1kmにあたる長根丘陵上にある（注1）。奈良・平安時代の遺跡としては、奈良東大寺大仏铸造にゆかりの国指定史跡の黄金山産金遺跡（涌谷町黄金追）は、長根窯跡の南方4.5kmの地にあたり（注2）、さらに産金遺跡の東南方約2.5kmの涌谷町小塙字追戸・中野地区には、約300基に近い大横穴群がある（注3）。（第2図）。

なお、長根窯跡の丘陵続きで西方約10kmの地には、多賀城創建期の屋瓦を作製した宮城県遠田郡田尻町木戸窯跡群があり（注4）、また、長根窯跡の西方約3kmの田尻町北長根、切伏沼の北側にも瓦窯跡がある（注5）。また、長根窯跡の北方3km、追川低地中に鳥状に浮ぶ登米郡米山町中津山の独立丘陵には、小田郡中山棚跡に擬定される遺跡がある（第1図）。



第1図 宮城県北部の古代遺跡分布図

- |            |            |
|------------|------------|
| 1. 長根窯跡    | 4. 日の出山窯跡群 |
| 2. 黄金山産金遺跡 | 5. 多賀城跡    |
| 3. 木戸窯跡群   |            |

- 注 1. 宮城県教育委員会「宮城県文化財調査報告書第19集一長根貝塚」 1969  
 注 2. 伊東信雄「天平產金道跡」涌谷町 1960  
 注 3. 氏家和典「宮城県涌谷町追戸A地区横穴群」、佐々木茂植「宮城県涌谷町追戸B地区横穴古墳群」、共に『仙台  
 湾周辺の考古学的研究』1968 所収  
 注 4. 宮城県教育委員会・多賀城町「多賀城跡調査報告書1、多賀城発守跡」 1970  
 注 5. 矢野義一「宮城県浪田郡田尻町出土吉瓦の問題点」、『歴史考古』6 1961  
 注 6. 伊東信雄「古代史」、『宮城県史』 1957



第2図 長根塚跡付近地形図

- |          |             |
|----------|-------------|
| 1. 長根塚跡  | 4. 黄金山塚跡    |
| 2. 長根貝塚  | 5. 追戸・中野横穴群 |
| 3. 北長根塚跡 | 6. 中山樹叢定地   |

## 2. 発見の経過

宮城県涌谷町小里長根窯跡の存在は、これまで全く知られていなかった。

涌谷町は、昭和45年12月3日より、涌谷町小里字長根南79の2番地内を通り町道小里長根道路新設改良工事を施工していたが、本窯跡は、その作業に従事していたブルドーザーが丘陵斜面を掘削したところ偶然に土器が出土したことをきっかけとして発見されたものである。

昭和45年12月17日、土器発見の報により、直ちに宮城県涌谷町教育委員会社会教育課長山本泰一および宮城県古川高等学校教諭佐々木茂楨らが現地踏査を行なったところ、土器の破片とともにスサ入り窯壁の断片が散乱していることから、土器の出土は窯跡の破壊に伴うものであることを確認した。窯跡はすでに大部分が破壊されていたが、付近に散乱していた遺物を見ると、器形・製作手法ともに極めて古い要素をもつものと思われた。ついで12月20日に、宮城県多賀城跡調査研究所技師桑原滋郎・同平川南・同進藤秋輝と佐々木茂楨は、再度現地調査を行ない、窯跡の一部分がなお残存していることを確認するとともに、出土土器の収集整理につとめた。

## 3. 遺構の現状

前に述べたように、長根窯跡は町道工事によって、たまたま発見されたものであり、われわれの調査以前にすでに大部分が破壊されていたので、窯跡の規模構造や遺物の出土状態等の詳細について知ることができないが、現地調査の結果判明したところを記すと、つぎのとおりである。

今回発見された窯跡は1基だけであるが、丘陵斜面の上端近くに位置する。地山の粗砂層に構築されており、窯の上半部をスサ入り粘土で架構した半地下式の窯である。窯の焼成室の大部分・燃焼室および灰原は既に破壊されているが、煙道に近い焼成室上端部が遺存している。残存部分における窯の幅は170cmであり、壁体の厚さは10cmを計る。壁体の現存高は13cmにすぎない。また、窯跡の主軸の方向は、ほぼ丘陵斜面の傾斜方向と一致しているとみられる（図版2 b）。

この窯跡は、次章で述べるように、須恵器のみを製作した遺跡である。

なお、今回発見された窯跡の東に隣接する丘陵斜面の畠地には須恵器片が散布していることから、付近にお数基の窯跡があるものと考えられる。

## 4. 出土遺物

今回偶然発見された窯跡から採集した遺物は、全て須恵器であり、瓦その他は認められない。器形には、杯・蓋・盤・長頸瓶・甕などがあり、甕の口縁部破片かと思われる小破片も含んでいる。一部の甕の破片を除き全て明褐色を呈し、器質はやや軟質である。或は窯中の焼もどりであるのかも知れない。胎土は小砂粒を含んでいるが、さして粗くはない。調整のロクロはすべて右まわりである。形態の特徴に製作手法を加味して観察すると次の如く分類することができる。

### 杯 I (図版 3 第3図1~5)

口径12cm、高さ4.5cm内外、底径は8.3cm前後で底部には 径7.5cm内外で高さ 1cm弱の高台が付く。体部と口縁部は外上方に直線的にのび、口縁端部はまるくおさめる。底部にはやや丸底風のものと、ほぼ平らなものとがある。

体部と底部の境界はケズリ再調整により明瞭な棱をなしている。高台は杯底部周縁より1cm弱内側に付けられ、割合厚く外方にふんばり、先端はやや肥厚して丸くおさめている。器面内外はロクロ調整されている。外面の体部下半から底部の全面にわたって、丁寧な回転ヘラケズリの再調整を行い、その後高台を付着している。多くは、回転ヘラスゲリ調整のため、その前段階のロクロからの離し方を知りえないが、1例のみであるが底部のケズリ残しの部分に、ヘラオコシの痕跡をとどめている資料のあることから、ロクロからの離し方がわかる(図版3c)。なお図示したものの内に著しく左右の高さの異なるものがある(図版3d、第3図3)。これは、体部下半から底部にかけて、回転ヘラケズリの再調整を行なう際に、土器をロクロ上に倒置して行なうのであるが、その折ロクロの回転面と土器の口縁面とを平行関係に置かなかつたためである(注1)。

### 杯 II (図版4d,e, 第3図11)

口径22.3cm、高さ5.4cmの大きさをもち、杯としてはやや大き目である。体部は底部から丸味をもって、わずかに内湾気味に立ちあがり、なかばからやや外反気味に外上方にひろがり丸くおさめた口縁端部にいたる。体部は浅目で体部と底部の境界はさして明瞭ではない。高台は径14cm弱で下方でやや肥厚して外方にふんばる。高台端面は、わずかに外上方にむき、中凹みである。体部は、ロクロ調整され、底部は回転ヘラケズリの再調整を行い、底部より小さめの高台を付着する。内面底部中央付近に、幅1mmほどの沈線が引かれている。或はヘラ記号であるかも知れない。

### 杯 III (第3図6)

口径14.6cm、高さ4.4cmのものである。体部は厚目の底部から、ごくわずかに内湾気味に外上方に立ちあがり、口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。底部は平底ではなくゆるい丸底をなし、高台はつかない。体部と底部の境界は、明瞭でない。器面内外はロクロ調整の後ロクロからはヘラオコシで離される。底部全面、回転ヘラケズリ再調整を行っているが、わづかのケズリ残しの部分にヘラオコシの痕跡を留めている。底部には、沈線によるX印が刻まれている。ヘラ記号かも知れない。

### 杯 IV (第3図7)

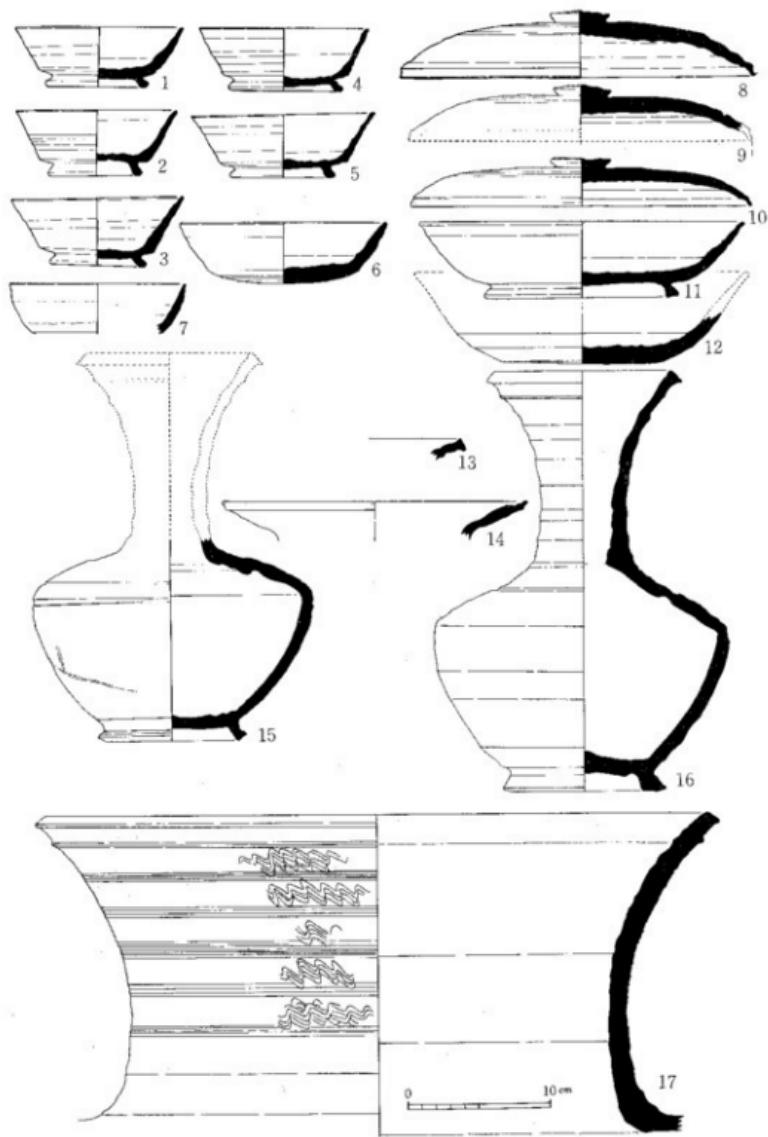
底部を欠く小破片である。体部が杯Iと異なり、やや内湾気味に外上方に立ちあがっており、口縁端部は丸くおさめている。高台がつくかどうかはわからない。口径12.4cm、底径9.3cmほどかと推定される。

### 盤 (第3図12)

体部下半から底部にかけての破片であり、全体の形はわからない。体部は径11.6cmの底部からゆるく内湾しつつ外上方に立ちあがる。高台は付かない。杯IIにくらべて厚目であり杯IIよりもやや深い器形であろうとおもわれる。体部下半から底部全面にかけて、回転ヘラケズリの再調整を行なっている。

### 蓋 (図版4a,b,c 第3図8,9,10)

直径約24.5cm、高さ約4.5cmのものである。天井部はなだらかな丸味をもって、口縁部に



第3図 須恵器 実測図

いたる。口縁部はわずかにおりまげるがやや外方をむいている。口縁端部はまるくおさめる。天井部中央にはかなり偏平なつまみがつく。つまみは偏平ではあるが、なお宝珠形のおもかげをとどめている。口縁部内面にかえりはつかない。内面はロクロ調整のみで、仕上げのナデはない。天井部上半は、回転ヘラケズリの再調整をした後、つまみを付着する。この蓋は杯IIとセットになるものと考えられる（図版4 e）。

#### 長頸瓶（図版5 第3図15・16）

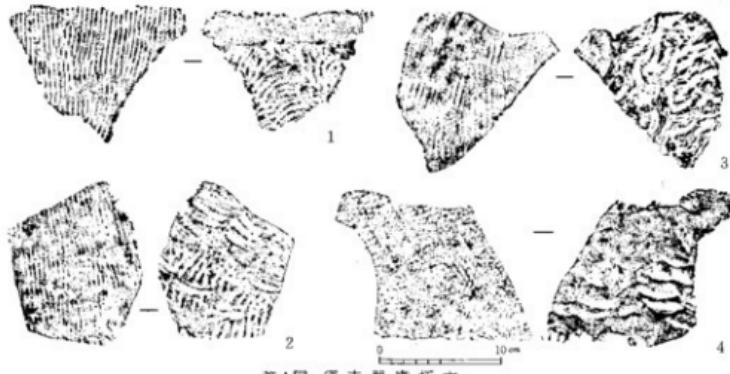
ほぼ完全なもの（図版5 a 第3図16）と、頭部を欠くもの（図版5 b 第3図15）がある。第3図16は高さ29.7cm、口径13.6cm、体部径20.7cmである。口縁部は細長く、上方に外反しつつのびる。口縁端部は、斜下方に短かくつまみだされ鈍い稜をなす。口縁端部の下方1cmほどのところに、1条の隆線があるのが特徴である。ほぼ直線的な肩部は鋭く屈曲し、胴部から底部にいたる。底部には厚い、外方にふんばった高台がつく。高台の端面はほぼ水平で、外周部がやや上方を向く。肩部から底部にかけて、回転ヘラケズリ調整をし、その後高台を付着する。体部と頭部の接合は三段構成であろう。第3図15は、頭部を欠くものである。やや内清気味の肩部が鈍角に屈曲し、胴部・底部にいたる。肩部と胴部の境界部分に太目の沈線が1条めぐる。高台は第3図16とやや異なり、さして厚くなく、垂直に短くのびて端部が外方に屈曲する。高台の端面は、外上方に向いている。胴部から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整を行い、その後ナデの仕上げを行っておりナデの重複する状態が観察される。頭部と体部の接合は三段構成である。胴部に2ヵ所と底部外面に1ヵ所ヘラ記号かと思われるものがある。胴部のものはX印で幅1mm弱の沈線であり、底部のそれは、針先で引いたようにごく細い沈線である（注2）。

#### 壺（？）（第3図13・14）

小破片のため判然としないが、壺の口縁部破片かと思われる。第3図14は口径21.5cm、第3図13は口径を測定しない。

#### 甕（図版6 第3図17、第4図）

口径部の形態がわかるものは1個体のみで、他は体部の小破片である。第3図17は大型甕で口径約48cm、頸部は体部からほぼ直線的に立ちあがり、上半でゆるやかに外反しつつ口縁端部にいたる。口縁端部は、下方にわずかにつまみ出し、丸くおさめている。口縁端



第4図 須恵器 壺 拓本

部の下方2cm程のところに隆線が1条めぐる。頸部の文様は先に述べた隆線の下方に施されている。それぞれ3ないし4条の沈線で区画した中に、櫛描き波状文を5段ほどこしている。なおこの1個体のみ灰色、部分的に黒灰色又は灰褐色を呈し、器質は堅微である。

他の甕体部小破片については、内外面の叩き目に幾種類かのちがいがある(第4図)。

注 1. 上器内部の深さは、左右ほぼ等しい。

注 2. 名取郡岩沼町、長谷寺横穴出土の長頸瓶は、長

根窯井出土長頸瓶・第3回15にきわめて類似する。

当窯の製品である可能性がつよい。佐藤宏・「宮

城縣岩沼町長谷寺横穴古墳群、『仙吉満周辺の考

古学的研究』宮城教育大学歴史研究会編 1968

## 5. 遺物の考察

これらの須恵器の特徴を列挙すると、次の通りである。

杯Iは、全て回転ヘラオコシでクロコから切り離し、丁寧な回転ヘラケズリの再調整が体部下半から底部にわたって行われる。このケズリにより体部と底部との境界が明瞭な稜をなす。高台が、底部周縁より1cmほど内側に付されるのも杯Iの大きな特徴である。この杯は、高台杯の初現期のもの——例えば、陶邑古窯址群TK217の3・4・5(注1)一にくらべると、高台部などや力強さに欠けるが、非常に良く似ており、又、藤原宮跡出土の須恵器杯IIa形式(注2)に類似する。杯IIは蓋とセットになるものと考えられる。杯IIは陶邑古窯址群のMT21の22に近く、蓋はMT21の24~28に類似する(注3)。このセットは大きさの点でややとなるが、藤原宮跡出土の蓋II形式(返りのない蓋)と杯II形式(台のある杯)のセットに非常に良く似ている(注4)。偏平なつまみは、東北地方の例では福島市小倉寺高畠窯跡出土の蓋のツマミに非常によく似ている(注5)。杯IIIは高台の付かないものであるが、底部がゆるい丸底をなす。形式的に陶邑TK217の6~9(注6)や藤原宮の杯I形式(注7)(台のない杯)に近いものと考えられる。こういった丸底風の杯は、福島市小倉寺高畠窯跡でも日の出山窯跡(注8)でも、多くの平底の杯に混ってわずかに出土しており、東北地方では、比較的古い様相を呈するものと考えられる。盤も外面の体部下半から底部にかけて丁寧な回転ヘラケズリ再調整を行っている。

長頸瓶は、頸部の口縁端部の下に弱い隆線が1条めぐるのが特徴であろう。さらに肩部から鋭く屈曲して底部にいたる削合浅い体部をもつことも形態上の特色である。肩部と胴部の境界には、凹線をめぐらしている。高台は、厚く外方にふんばった端面の水平なものと、さほど厚くなく端面が外上方をむいた、やはり外方にふんばったものがある。この長頸瓶は、高台がやや力強さを欠くが、陶邑古窯址群TK217の30(注9)と類似するものである。

以上のように、他地方の出土品と比較すると、陶邑古窯址群のTK217、MT21、藤原宮跡の出土品、福島市小倉寺高畠窯跡の出土品に類似し、地方色はほとんど目立たない。ところで陶邑古窯址群の編年では、TK217は、第III期—宝珠ツマミと高台の出現以後一の型式の内の2番目の型式である。またMT21は、第IV期—蓋内面のかえり消失以後一の5型式の内の最初の型式である。そして第III期の実年代は、7世紀前半から7世紀後半、第VI期は、7世紀後半から8世紀末に比定されている(注10)。さらに、藤原宮跡出土の反りのない蓋、台のある杯のセットは8世紀初頭と考えられており(注11)、また福島市小倉寺窯跡の出土品は、偏平な宝珠ツマミをもち、内面にかえりのある蓋があることなどから8世紀前半に位置づけられており(注12)、多賀城創建以前の所産と考えられる。



第5図 須恵器蓋・杯比較図

ところで、多賀城・多賀城廃寺の創建の瓦を焼成した宮城県加美郡色麻村日の出山窯跡群A地点で、瓦と伴出した須恵器の内、高台付杯や長頸瓶は、今回発見された長根窯跡出土の高台付杯・長頸瓶よりも新しい様相を呈している。杯の高台の付く位置や長頸瓶の体部、高台の形に、その差異が顕著である。

従って、長根窯跡から出土した須恵器は、日の出山窯跡群A地点のものより古く、むしろ現在知られるかぎり、東北最古と考えられている福島市小倉寺高烟窯跡の出土品に近い。

以上のことから、これらの須恵器は、8世紀初頭の所産と考えられる（補注）。

注 1. 平安学園「陶器古窯址群 I」1966年版39の3.4.5

注 2. 東農場教育委員会「藤原宮」1969 50. 51頁

注 3. 注1と同じ、図版41の22. 24~28

注 4. 注2と同じ

注 5. 福島市教育委員会「福島市の文化財」「福島市 小倉寺高烟窯跡発掘調査報告」1969 39頁

注 6. 注1と同じ、図版39の6~9

注 7. 注2と同じ 50頁

注 8. 宮城県教育委員会「日の出山窯跡群」1970

注 9. 注1と同じ 図版40の30

注 10. 注1と同じ 11頁

注 11. 注2と同じ 129頁

注 12. 注5と同じ 41頁

補注 第5図3は、ヘラオコシで、再調整は手持不定方向へのラケズリである。4は体下部から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整がある。9~11は静止系切手法でロクロから纏されたものである。11の底部は手持のヘラケズリ再調整がある。12は丸底風のもので、底部は手持不定方向へのラケズリである。

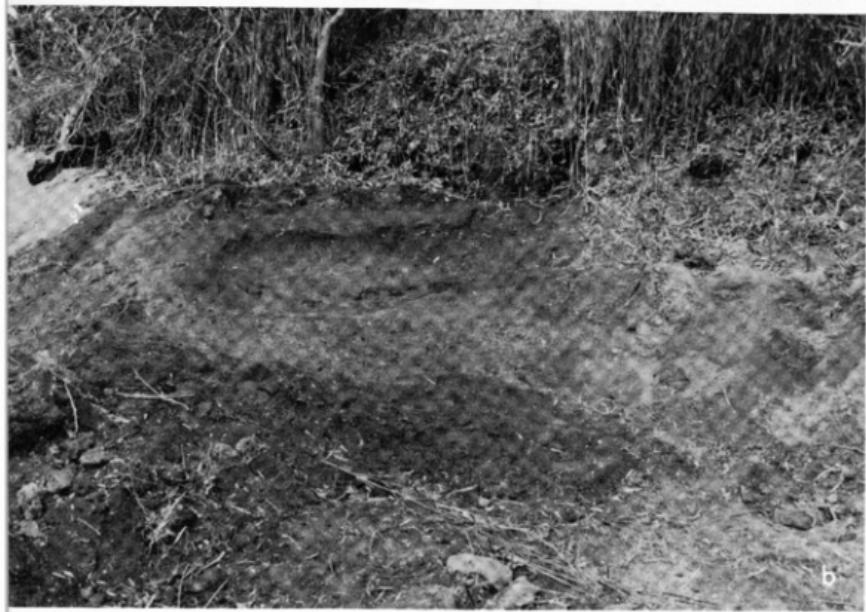
## 6. むすび

これまで述べてきたように、涌谷町小里の長根窯跡は、工事による偶然の発見であったが、宮城県最古の須恵器窯跡であることが明らかになった。これは東北古代史にとって極めて重要な問題を提起するものである。今後、学術的な発掘調査を行なうことにより、需要供給関係等を解明し、そのもつ歴史的意義を追求したいと思う。

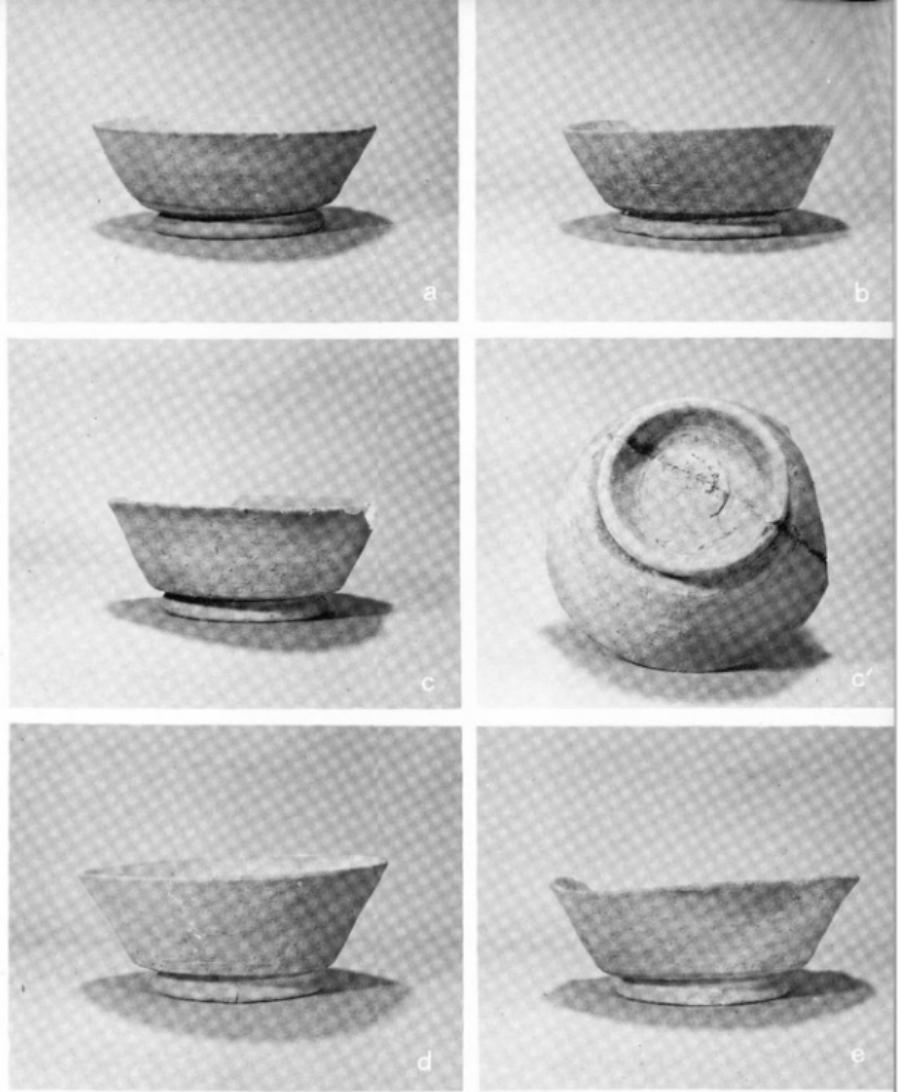
末筆ながら、本稿を終えるにあたり、遺物の観察及び考収に種々御教示をいただいた宮城県多賀城跡調査研究所の岡田茂弘所長をはじめ工藤雅樹・平川南・進藤秋輝の各氏に対し厚く感謝の意を表するものである。



図版 I. 長根窯跡付近航空写真



図版2. a. 窟跡遠景 b. 窟底残存部



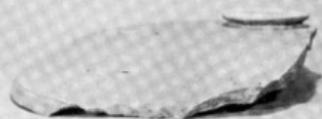
图版3. 須惠器杯 I



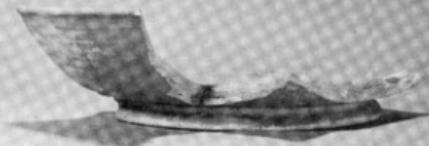
a



b



c



d



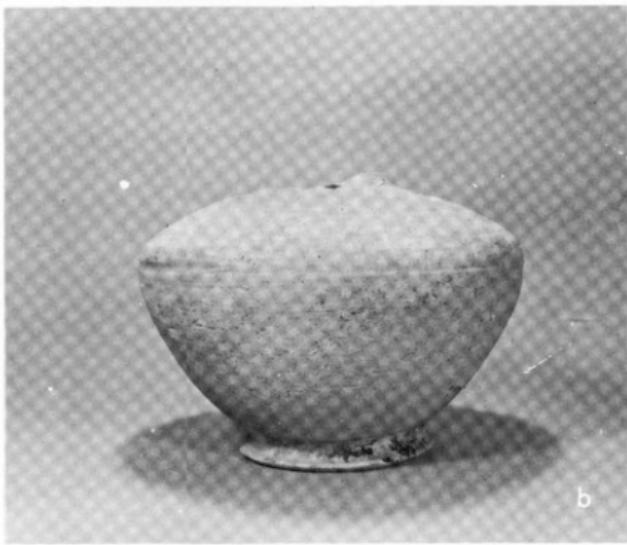
e

圖版 4

須惠器蓋・杯II

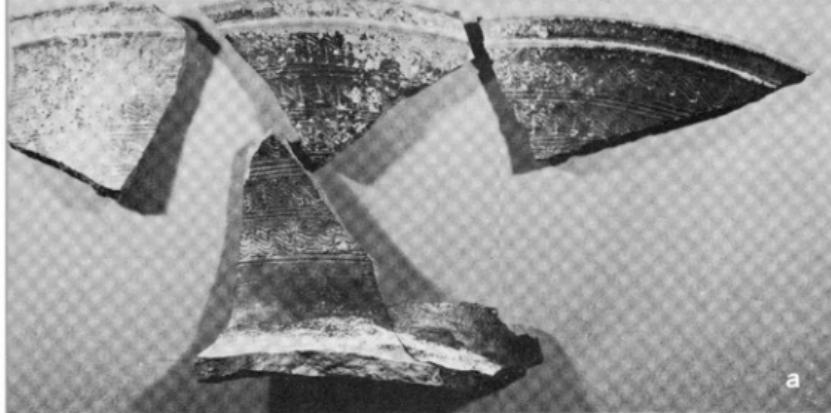


a

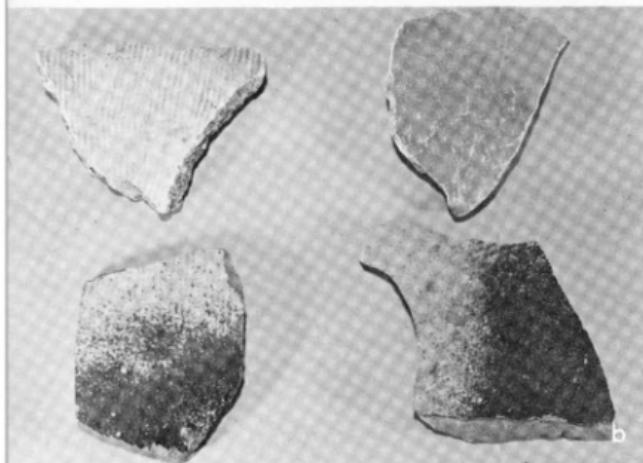


b

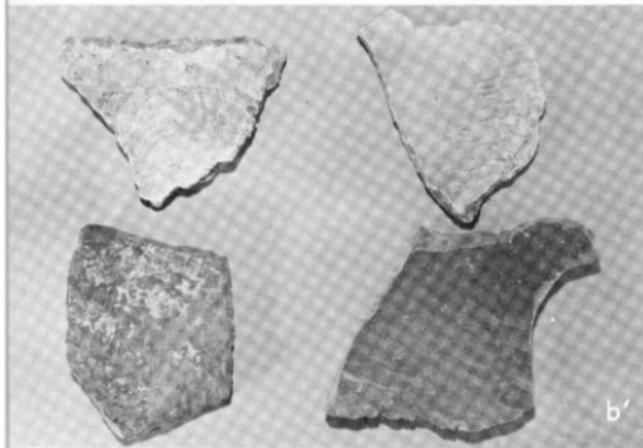
圖版 5.  
須惠器長頸瓶



a



b



b'

図版6. 須恵器遺

昭和46年2月10日 印刷

昭和46年2月15日 発行

発行者 涌谷町教育委員会  
宮城県渡田郡涌谷町字新町裏153の2

印刷者 小泉印刷株式会社

